

集学的治療で長期生存が得られている膵 solid-pseudopapillary tumor の1例

戸畑共立病院 鞆田義士、森岡丈明、成定宏之、今田肇
大田真、樋口優子、垣下ひかる、溝口勢悟

症例は50歳代女性。2002年10月前医で膵 solid-pseudopapillary tumor に対し膵切除施行。2005年4月多発肝転移が出現し手術および焼灼術施行。翌年8月と3月にRFA施行。2008年9月からTACEを5回施行。2012年2月RFA施行、同年9月からGEM4コース施行するもPD。2013年1月GEM+CDDP2コース施行するも、CDDPのアレルギーが出現。当院に紹介受診、FDG-PETにて肝内に3ヶ所の転移性腫瘍を指摘、3月より温熱放射線治療にS-1内服開始。放射線は50Gy/25回照射、その後もS-1隔日内服と隔週の温熱療法を継続しSDで経過。2015年3月で治療開始後2年経過し一旦治療休止するも、6月のFDG-PET検査で肝転移再発。肝右葉へ放射線治療施行(50Gy/25回)、S-1隔日内服開始。8月には肝左葉への定位放射線治療施行(40Gy/5回)。この間温熱療法は隔週で継続。10月CTで肝転移の増悪あり。11月よりアブラキサン/GEMへ変更、2016年1月からはGEM単独による温熱化学療法施行継続し、多発肝転移の縮小傾向が認められ現在も治療継続中である。

前医で化学療法施行されるも肝転移のコントロール不良であったが、当院での温熱化学療法で長期間のSDを保つ事が出来た。さらに現在、前医で使用した薬剤に温熱療法を併用することで腫瘍の縮小が維持できており、化学療法の有効性が確立されていない本疾患に対する温熱療法の有用性が示唆された。